

作家・志賀泉が映像で語る 故郷福島とチェルノブイリ

日時 2018年 **7月21日** (土)
午後**2時**～4時

予約不要
直接会場にお越し下さい。

会場 **コール田無 イベントルーム**

西武新宿線田無駅北口から徒歩7分
裏面の地図をご覧ください ⇒

資料代 300 円
問合先 渡辺 (042-467-2089)



●復興が進めば進むほど、立場の弱い人は社会の片隅に追いやられて、やがて消されてしまう。復興にはそういう一面もあるという事実を忘れてはいけません。

●福島に限りません。忘れられようとしている人たち、切り捨てられようとしている人たちの声を拾い、忘れないというメッセージを送り続けるのも作家である僕の役割です。

●チェルノブイリの廃墟を見るということはそこに流れていた時間を同時にみることです。何でもないような風景でも、体験者の言葉を重ねると風景の意味が変わってきます。

●故郷を汚染されるということは、意味ある場所からその意味を剥ぎ取られることで、同時に、人間としての尊厳も損なわれることなんです。

●場所を失うということは未来を奪われるだけじゃないんです。過去まで否定されることなんです。未来と過去を失って初めて絶望が生まれるんです。

(志賀泉講演語録より)

僕が原発事故について書くときは、小説でもエッセーでも決めているルールがあって…、それは「被災者が悩むように悩む」「被災者の迷うように迷う」です。

■志賀泉プロフィール

- 1960年福島県南相馬市小高区生まれ。福島県立双葉高校卒業。二松学舎大学文学部卒業。現在、狛江市社会福祉協議会で知的障害者施設勤務。
- 『指の音楽』(筑摩書房、2004年)で第20回太宰治賞受賞。『TUNAMI』(筑摩書房、2007年)。近著『無情の神が舞い降りる』(筑摩書房、2017年)。また、地域情報紙『タウン通信』では人気エッセー「猫耳南風」を好評連載中。
- 主演のドキュメンタリー映画「原発被災地になった故郷への旅」(2014年)は、パーソナル・ドキュメンタリー賞受賞など、多方面で活躍中。

